

『緋文字』の主題に就いて

秋 山 健

I

ホーソンの代表作『緋文字』は実に多様なシンボルに充ちた小説である。従って今迄にも随分さまざまな解釈が加えられて来た。私はここで不用意に小説という言葉を使ったが、正確にいつて『緋文字』が Novel であるか、Romance であるか、乃至は Allegory であるかといったジャンル分けの問題でさえ、批評家の間で論議の対象になって来たようである。今この問題をここで取上げようというのではないが、それ程に迄『緋文字』は問題の余地を含んだ小説であると言えよう。従って、この小説の語っている主題に就いても幾通りかの考え方が可能になって来る訳である。例えば、ヘスター・プリンを主人公として、その主題を考えるのも一つの可能性である。『緋文字』は姦通の罪を犯かし、一六三〇年代のこの土地、マサチューセッツ州、ボストンの法律に従って、とらえ

られた彼女が監獄からひき出され、この罪の印である緋文字の「A」を胸につけて処刑台に立ち、群衆の前に曝されるところから始っている。不義の結果の娘、パールと共に、胸に罪の印の緋文字を生涯つけていなければならない彼女は、ピュリタニズムのきびしい戒律の支配するこの社会から、あるへだたりをおいて生活しなければならない。あらゆる特権や地位はとり上げられ、生きるに必要なだけの生活の糧を求めて、娘パールを養育する事に希望をつなく。このような罪と試練に耐えながら、社会に対する自分の罪のつぐないと他人への奉仕によって、究極には、きびしい戒律の社会から尊敬の目をもってみられる女性となる。彼女の態度には終始一貫して毅然としたところがある。罪の共犯者である牧師アーサー・ディムズデールの苦悩に充ちた生き方と比較すれば、この小説に一貫してみられるヘスターの毅然とした生き方はたしかに読者を引きつける力を充分に持っている。又同時に

ヘスターの生き方全体を通じて、作者が、人間性を窒息させるような、寛容さに欠けた、頑迷なピューリタニズムの社会に対してするどい批判の目を向けているようにさえ読みとられる。事実、以上のような見方は従来、多くの批評家によってなされて来たし、一応、我々を納得させる面を多く持っている。この見解に立つ批評家達はホーンソンを浪漫主義の系列の作家として考えて来た。然し乍ら、この見解もどうやら、この小説全体の主題としては、充分な妥当性を持っているとは言えないように思われる。その理由としては、小説全体の統一性を考慮すれば、この見解からだけではあまりにも多くの要素を犠牲にしなければならぬからである。

今一つの可能性は、ヘスターと共に罪を犯した牧師、アーサー・ディムズデルを主人公として、彼のたどった生き方に小説の主題を求めようとする見方である。彼の場合はヘスターとはまったく対照的な立場におかれている。罪の共犯者である彼は、この小説の発端に於いては、ヘスターの場合と異って、社会の人々の目から隠されている。従って、彼の罪は社会の罰の対象にならなかつたわりに、心の内部の問題になる。ヘスターの場合は日々の生活が贖いの生活であり、重荷を軽くしていくのにひきかえて、彼の場合は、益々重荷を加える生活である。彼の罪の意識が深刻に彼を悩ますに従って、肉体的な衰弱となって表面に現われて来る。この場合、彼の苦悩は、罪を告白せずに隠しておいた事による対社会的

な良心の呵責ばかりでなく、もっと根源的な宗教的な罪の意識から来る苦悩である。一度はこの社会から逃れる事によって、苦しみを回避しようとする誘惑に身をまかせる決心をするが、究極に於いて、神の許しを確信し、罪を告白する事に依って、安らぎを得る。この見解に立つ批評家達は、ホーンソンが人間の存在論的な罪からの救済に深い関心を持っていた事を指摘する。確かにこの解釈には、人間にとっては、墮落し、罪の意識に苦悩することによって、はじめて神の救済にあづかる事が可能になるという *felix culpa* の思想を読みとることも出来る。この見解は前のものとまったく対照的な見解であるが、然し乍ら、同時に、同じ理由によって、単独ではこの小説全体の主題としては充分、かつ妥当なものとは云えない。

主題は小説全体に統一を与えるようなものでなければならぬ。小説の中のあらゆる部分が何らかの意味で主題を支えていなければならない。主題をこういう風に考えると、それは、我々が通常、プロット、或いは *narrative Structure* という言葉で意味するものと、同じことになる。本来、これらは同じ意味内容のものであり、両者の関係を言葉を変えて言えば、内容 (*content*) と形式 (*form*) の問題になる訳だが、これらのものにしても文学作品に於いては事実不可分のものである。

一般に主題の多くは葛藤を扱っている。或る力と或る力と

の対立、そこにはからみ合いがあり、最後に解決がある。このような主題は劇的な効果を持つ。併しながら、問題を追求する形の主題もあり得る。追求のプロセスに於いて、多少の葛藤はあっても、主題自体は劇的な葛藤を本質としない。

『緋文字』の統一性という点から考えると、今迄挙げた見解はそれぞれ単独では主題にはなり得ない。前者のように対社会との葛藤、後者のように心の内部での葛藤、それぞれに劇的なシチュエーションを持っていながら、この小説の持つ主題は、葛藤そのものというよりも、追求の形のもののよう私には思われる。この小説全体を動かし、意味を与えているものは、小説のはじまる前に既に犯された姦通の罪である。この罪は小説の主要な人物、ヘスターとデイズデールに異った影響を与え、生き方をさせるのである。更には、ヘスターの前の夫であったロジャー・チリングワースという人物にも異った影響を与えているのである。以上のような考え方がらすると、この小説の主題は、小説の題が示すように、緋文字で象徴される姦通という罪の人間に与えるさまざまな結果の追求とする見解が最も妥当のようである。

さて、緋文字は既に述べたように、姦通 (Adultery) の罪を犯した者に、見せしめの為に頭文字の A を緋色の布で刺繍して胸につけさせる刑罰から由来したものであるが、姦通の罪は古くから「モーゼの十誡」として知られている戒律の第七番目に定められた罪過であり、新約に於いても同じように主

要な罪過とされている。マタイによる福音書によれば、「それ心より悪しき念いづ、即ち殺人、姦淫、淫行、竊盜、偽証、誹謗、これらは人を汚すものなり」と記されている。このようにキリスト教で定められたさまざまな罪過はいづれもキリスト教の根源的な人間観に基づいたものである。新約聖書、ロマ書でパウロが語っている「ひとりの不従順によりて多くのひとりの罪人とせられ……」という言葉は、原罪 (Original Sin) の思想を裏書きしているが、ここでいっている「ひとりの不従順」とは、アダムが神の命令にそむいて禁断の果実をむさぼったという神話に言及しているのである。いづれにせよ、それは人間の罪性——神の前に人間が不完全である——を指摘した、存在論的な罪意識を意味している。このような context から個々の罪過を考えなければ宗教的な罪の意識は理解出来ないのではあるまいか。キリスト教の伝統をもたない我々にとって、罪は、或る時代、或いはある社会の定められたにそむく事を意味する。こうした掟は集団の中の個人対個人、或いは更に集団対集団の利害の衝突をさけるために定められた、お互いの利益の最大公約的なものである。このような罪の意識はきわめて相対的なものであって、時代が社会が変動する事によって容易に変わり得るものである。キリスト教の罪の意識は、それが単に我々の行為の領域にかかわる罪過に対してではなく、我々の存在の根源に横たわっているような罪過に対してのものである。行為の領域にのみ止まる場

合、それは道徳とかかわりを持つ罪過である。

更に罪の問題を別の面から少し考えてみよう。ある一つの罪過を犯す場合、犯した者の罪に対する主観的な意識によって、二つの異った場合が考えられる。例えば、不治の病に苦しむ父親を安楽死させたとする。この場合、たとえどんなにその行為が父の苦痛を救ったという理由で正当化出来るとしても、その行為の持つ重大な罪性を知って、罪の意識に苦しむ者と、その行為を、以上のような理由で正当化出来るものとの罪は、客観的には同じ行為であっても主観的には異つて来るといふ考え方があつた。これは罪に対する意識の問題であるが、L. J. Ficks は前者の場合を *formal Sin* と呼び、後者の場合を *material Sin* と呼んで区別してゐる。

ここで話を本筋にもどすことにしよう。姦通の罪はヘスターとデイズデールの生き方に異つた影響を与えるのであるが、それは見方を変えれば、彼等の罪に対する意識と態度によつて異つて来るといふよう。以下、この小説の主題にそつて二人のたどつた生き方、及び副次的役割を演じる他の二人、パールとチリングワースに就いてもう少し詳しく考えてみよう。

II ヘスターの場合

ヘスターの犯した姦通の罪は彼女自身の自由意志で、即ち告白の形で明るみに出されたものではなかつた。小説はその

事に触れてはいないが、それは罪の結果として生れて来た娘、パールによつて明るみに出されたものである。この点、パールは小説全体を通じて重要な役割を演ずるが、それは後程触れる事として、このようにしてヘスターの胸にあらわにつけられた緋文字は彼女の生き方にさまざまに働きかける。小説の語るところによれば、この罪を犯したものは、小説の背景になつてゐる社会では罰として死刑を定めていた。彼女の場合は寛大なばかりにより三時間人々の前に曝し者にされ、一生涯罪の印の緋文字を胸につけなければならぬ事になつてゐた。彼女がそれを胸につけてゐる限り、この印の意味を知り、この罪の当然の罰を期待する周囲の人々から彼女は非難の目でみられなければならなかつた。彼女の苦しみは、このように、主として彼女をめぐる外の世界との關係にあつた。小説の中でしばしばのべられてゐるように、緋文字は彼女をめぐる周囲の世界にあるへだたり (*isolation*) をつくる不可思議な力をもつてゐる。このへだたりを縮少する事がヘスターに課せられた *penance* (贖いの苦行) である。それは想像以上にきびしい試練である。つましい生活の中に彼女は他人への献身的な奉仕という形で自分の *penance* を果すのである。

Much of the time, which she might readily have applied to the better efforts of her art, she employed

in making coarse garments for the poor. It is probable that there was an idea of *penance* in this mode of occupation, and that she offered up a real sacrifice of enjoyment, in devoting so many hours to such rude handiwork. (*Italics mine*) (p. 95)

この様なハスターの生き方は、徐々にはあるが時を経るに従って周囲とのへだたりをちぎめていった。胸につけた緋文字はそれに従って意味を變えて来るのである。

The letter was the symbol of her calling. Such helpfulness was found in her,—so much power to do, and power to sympathize,—that many people refused to interpret the scarlet A by its original significance. They said it meant Able; so strong was Hester Prynne, with a woman's strength. (pp. 183-4)

Individuals in private life, meanwhile, had quite forgiven Hester Prynne for her frailty; nay, more, they had begun to look upon the scarlet letter as the token, not of that one sin, for which she had borne so long and dreary a penance, but of her many good deeds since. “Do you see that woman with the embroidered badge?” they would say to strangers. “It is our Hester,—the town's own Hester, who is so

kind to the poor, so helpful to the sick, so comfortable to the afflicted!” (p. 185)

七年の歳月が彼女の社会的地位をまったく変えてしまったのである。このようにして彼女は社会に対して贖いを果すのであるが、それは、外部の世界に対する関係に於いてだけであった。彼女の心の内部の世界に於いて、罪はどれだけの意味を持っていたであろうか。はじめに述べたように彼女は自ら犯した罪を告白の形で明るみに出したのではなかった。彼女はこの罪に対して、社会とは異った考え方をしていた。彼女は自分の行爲が社会が定めた法律を破ったという意識以上のものをもっていなかった。森の中のティムズデルとの出会に於いて、彼女の語る「私達のした事には何か神聖なものがあつた」(p. 222) という言葉にも裏書きをされているように、社会の課した罰に対して贖いの生活をしている間も、彼女の内部では確固として自分の見解を常に持ちつづけていた。

For years past she had looked from this estranged point of view at human institutions, and whatever priests or legislators had established; criticising all with hardly more reverence than the Indian would feel for the clerical band, the judicial robe, the pillory, the gallows, the fireside, or the church. (p. 227)

彼女にとって罪の意識は社会契約的な次元のものであって、宗教的な次元のものにはなり得ない。永い歳月を厳しい試練に耐えながら、自分の幸福を疎外する社会に求めて止まらなかった理由に就いて、小説はこの世にある人間を不思議な力で動かしている、きけがたい宿命であると説明すると同時に、ヘスターが自分では努めて隠そうとしている別の感情

It might be that another feeling kept her within the scene and pathway that had been so fatal. There dwelt, there trode the feet of one with whom she deemed herself connected in a union, that unrecognized on earth, would bring them together before the bar of final judgment, and make that their marriage-altar, for a joint futurity of endless retribution. (p. 91)

が彼女を止どめていたのだということ極めて暗示的に附け加えている。

彼女の内部のこのような信念は、外部の世界―社会―に対する際にも表わされている。小説の発端に於いて監獄から出て来た時の様子は、待ちうけた群衆の期待に反して、「威容と威敵を具えた貴婦人」のようであり、その後、終始もちつづける彼女のこの毅然とした態度は、彼女の内部の信念に対する自信を物語り、同時に社会に対する挑戦ともいえよう。

十三章に於いてはヘスターの冷静な印象について次のような

説明が加えられている。

The world's law was no law for her (i.e. Hester's) mind. It was an age in which the human intellect, newly emancipated, had taken a more active and a wider range than for many century before. Men of the sword had overthrown nobles and kings. Men bolder than these had overthrown and rearranged—not actually, but within the sphere of theory which was their most real abode—the whole system of ancient prejudice, wherewith was linked much of ancient principle. Hester Prynne imbibed this spirit. She assumed a freedom of speculation, then common enough on the other side of the Atlantic, but which our forefathers, had they known it, would have held to be a deadlier crime than that stigmatized by the scarlet letter. (p. 187)

ここに引用した箇所はヘスターの心の内側の信念を物語っていると共に、この社会の中にあつて絶対的に見える法律ももっと広い視野からみれば相対的なものであることを指摘しているに他ならない。更にその後で彼女が以上のような信念を内に持ちながら、社会の課する法に従順に従っている事実が就いて、次のような説明が加えられている。

It is remarkable that persons who speculate the most boldly often conform with the most perfect quietude to the external regulations of society. The thought suffices them, without investing itself in the flesh and blood of action. So it seemed to be with Hester. (p. 187)

然し乍ら、ヘスターの信念はいつまでも心の内部に隠されて、行動に移されないでいる種類のものではない。それは時が来れば、形をとって行為となって表われるものである。十七章の森に於ける出会で、ヘスターはデイズデールの身心共に衰弱しているのを見て、この狭い社会から、共に逃れて、もっと自由に幸福な世界へ行く事を提案し、デイズデールをときふせる。更にその為に必要な手段を彼女の手ですべてととのえるのである。彼女は自分の信念にもとづいて、この計画が実現する事による、自分達二人の幸福に就いて、露程の疑いも持たない。

Thus, we seem to see that, as regarded Hester Prynne, the whole seven years of outlaw and ignominy had been little other than a preparation for this very hour. (p. 228)

という説明は彼女の、今迄に述べたような見解を裏付ける言

葉と解される。

さて以上、述べたようなヘスターの信念はこの小説の殆んど終りに近い二十三章に於いて根本的な動搖をうけるのである。デイズデールが群衆の前で、かつて彼女が緋文字をつけて曝された処刑台の上に立って、すべての罪を人々に告白した時、弱々しい息の下から彼女に向っていった「我々二人が森の中で夢にえがいた事よりもこの方がよいだろう」(Is not this better than what we dreamed of in the forest? (p. 288)) という言葉に、彼女はただ「わかりません。わかりません」(I know not. I know not.) と答える事しか出来なかつたのである。そしてまさに息絶えようとしているデイズデールに対して、彼女は次のように問いかけるのである。

“Shall we not meet again?” whispered she, bending her face down close to his. “Shall we not spend our immortal life together? Surely, surely, we have ransomed one another, with all this woe! Thou lookest far into eternity, with those bright dying eyes! Then tell me what thou seest?” (Italics mine) (p. 291)

ヘスターには死ぬ瞬間にも輝いた眼でみつめているデイズデールの次元の世界——永遠の世界——が見えないのである。彼女はデイズデールが何を見つめているが知りたいのである。彼女にもデイズデールの次元の世界がみえるよう

になつたかどうか、残る終局の一章はあまり多くの事を語つてくれない。パールと共にその後、この地を離れていた彼女は、幾年か経つた或る日、一人で再びこの地に帰ってくるのである。胸には自分の自由意志で緋文字をつけた。併しこの印も以前の恥の印ではなく、「それに対しては悲しみを感ずべきもの、それを見ては畏れながらも尊敬を感ずべきものとしての一つの典型となつてきた」のである。相談に来る人々の求めに応じて、彼女は自分のかたい信念を語つてなぐさめてやるのである。

She assured them of her firm belief, that, at some brighter period, when the world should have grown ripe for it, in Heaven's own time a new truth would be revealed, in order to establish the whole relation between man and woman on a surer ground of mutual happiness. (p. 299)

ここに引用した彼女の信念を以前の信念と対比させてみれば、彼女の心の内部でおこつた変化を充分に読みとる事が出来るであらう。

罪が完全に許されるためには贖いの苦行 (Penance) だけでは充分でない。そのためには悔悛 (Penitence) がなされなければならぬ。しかもそれは他から強制される所ではなく、自分の自由意志でなされた告白でなければ、神から罪の許し

を得て、恵みに与ることは出来ない。このような許しの思想が正統的なキリスト教の教義に叫ぶ思想かどうかからないが、少なくともこの小説全体に流れている思想である。既に述べた Fick の見解からすれば、ヘスターの犯した罪は material sin の次元のものであつたといえよう。彼女は自分の罪に対して、社会的な責任はとつたが、それ以上の罪の意識は持たなかつた。彼女が果した社会に対する献身的な奉仕の行為は、Penance であり Penitence ではなかつた。五章ではすでに引用した如く、彼女の奉仕を there was an idea of penance in this mode of occupation だと説明して、その後で彼女の心の状態について、

This morbid meddling of conscience with an innate-rial matter betokened, it is to be feared, no genuine and steadfast penitence, but something doubtful, something that might be deeply wrong, beneath. (Italics mine) (p. 95)

といっているのは、実はその事を指摘しているのである。従つて、終局の二十四章に於いて再び彼女が帰つて来た時、

...there was a more real life for Hester Prynne here, in New England, than in that unknown region where Pearl had found a home. Here had been her sin; here, her sorrow; and here was yet to be her penitence.

She had returned, therefore, and resumed,—of her own free will, for not the sternest magistrate of that iron period would have imposed it,—resumed the symbol of which we have related so dark a tale. (Italics mine) (p. 298)

という説明が加えられているのはそれを充分に裏書きしていると見えよう。彼女が自由意志で悔悛の告白 (penitence) をなす時にはじめて罪は許されるのである。

ヘスターに就いてすでに多くの紙面を費したが、更にこの小説に於いて重要な機能^{フュンクシオン}を果すパールに就いて触れなければならぬ。或る批評家の言及にもかかわらず、卒直にいつて私はパールが性格創造に於いて、単にあるファンクションを演ずる以上に成功したとは思えない。私にはパールが描かれている言動から生身の子供として脳裡に想像する事が出来ないのである。それは決してパールのこの小説に於ける役割を過少評価しようというのではない。むしろ反対に非常に重要なファンクションを持っているのである。その働きは複雑であり多様である。

(一) パールが光の image を持っている。

この小説の中で屢々くり返し使用されている光の image は常にパールと関係して用いられている。例えば、

...that there was an absolute circle of radiance around

her, on the darksome cottage floor, (p. 102)

Pearl...did actually catch the sunshine, and stood laughing in the midst of it, all brightened by its splendour. (p. 209)

In the brook beneath stood another child—another child and the same,—with like-wise its ray of golden bright. (p. 237)

Pearl, herself a symbol, and the connecting link between those two. They stood in the noon of that strange and solemn splendour, as if it were the light that is to reveal all secrets, and the daybreak that shall unite all who belong to one another. (p. 175)

光は暗闇を照らす働きをする事は勿論、ここでは隠された罪を明るみに出す機能を意味している。

(二) パールはヘスターとデイズデールの間に生れた罪の子である。従つてこの二人に対して、さまざまに働きかける。まずヘスターに対しては、隠された罪を明るみに出すパールの働きは、既に述べたように、この小説の発端に於いてヘスターが処刑台へ立った事実によつてはじまる。彼女はいつも母と共にいて、片時も、胸の緋文字の意味を母に忘れさせない。それは特に森のシーンで、ヘスターがパールに緋文字の意味を聞くと、パールは答えて、

“It is for the same reason that the minister keeps his hand over his heart!” (p. 203)

といつたり、更にノスターが十九章に於いて、胸の緋文字を取り去った時、決して母のところに近づかず、再びノスターが胸をこぼしひるぶ。

“Now thou art my mother indeed! And I am thy little Pearl!”

In a mood of tenderness that was not unusual with her, she drew down her mother's head, and kissed her brow and both her cheeks. But then,—by a kind of necessity that always impelled this child to alloy whatever comfort she might chance to give a throb of anguish—Pearl put up her mouth, and kissed the scarlet letter too! (p. 241)

の如くあるまうち中によく表れている。

この事はノスターに対してばかりでなく、デイズデールに対してもいえる。パールは、デイズデールの胸にかくされた罪の秘密に関心を持ち、それを執拗に問いつめる。

What does the letter mean, mother?—and why does thou wear it?—and why does the minister keep his hand over his heart? (p. 205)

“And mother, he has his hand over his heart! Is it because, when the minister wrote his name in the book, the Black Man set his mark in that place?” (p. 213)

“And will he always keep his hand over his heart?” (p. 242)

十九章の森のシーンでデイズデールがパールの額に接吻するとその額を小川で洗うのである。このしぐさの中に、実はパールのこの小説の中で持っている重要な役割が暗示されている。後に述べるようにデイズデールの罪の贖い——悔悛の過程はパールとデイズデールとの関係に投影してみる事も出来るのである。十二章でパールがデイズデールにさややく言葉が分らない。デイズデールがたづねると、パールは「貴方は勇気がない、真実でないか分らないのだ」と答える。こうした二人の間も二十三章に於いて「デイズデールが罪の告白を終えた時、はじめて和解するに到る。パールはデイズデールの唇に接吻する。

Pearl kissed his lips. A spell was broken. The great scene of grief in which the wild infant bore a part, had developed all her sympathies; and as her tears fell upon her father's cheek, they were the pledge that she would grow up amid human joy and sorrow,

nor forever as battle with the world; but be a woman in it. Towards her mother, too, Pearl's errand as a messenger of anguish was all fulfilled. (p. 291)

デイズデールの罪の悔悛の時がパールとの和解でもあり、それは同時にパールのファンクションとしての役割の終りでもある。

Ⅲ デイズデールの場合

既に幾度か述べたように、デイズデールのおかれた立場はヘスターのそれとまったく対照的であった。発端においてデイズデールの犯した罪は隠されているばかりでなく、その罪を糾明し、罰する立場にある。当時の聖職階級は社会の精神的な指導階級であるとともに、実際の政治にも強い影響力を持っていた。従って彼の立場は極めてアイロニカルである。デイズデールの苦悩は彼の内部の問題であり、ヘスターの如く、外部の社会との間の問題ではなかった。「罪の意識の追求」というこの小説の主題からデイズデールの場合をみるならば、プロログとエピログを形成している最初と最後の各一章を除いて、多少不均等ではあるが四つの部分に分けて考える事が出来よう。即ち十五章迄は、彼が罪の意識に空しく苦悩する過程が七年間にわたって述べられている。十六章から十九章迄は森の中に於けるヘスターとの出会い。

二十章より二十二章は彼の心の内部での烈しい葛藤と新しい方向への転化が極めて暗示的に述べられ、二十三章では劇的な罪の告白と救済の確信に到達する。以下、私は各部分を追って説明を試みながら、デイズデールの罪に対する意識を考察してみたいと思う。

最初の十五章迄はデイズデールがヘスターと共に姦通の罪を犯した事が次第に明らかになされ、同時にその罪の故に、デイズデールが烈しく苦悩する。その苦悩は言わば彼にとって Penance であるが、この段階に於いては未だ罪の許しの確信には到り得ない。それには更に Penitence が必要なのである。従って苦悩は深刻ではあるが空しいものであった。十二章で、深夜一人で処刑台の上にとたつて、悔悛 (Penitence) をしようとするが、それは悔悛の真以事にすぎなかった。七年前、同じ場所ヘスターの罪は群衆の前で明るみに出された。その時、当然一緒に立つべきであった彼はその罪を胸の内に隠したまま、罪の意識に苦しみ、七年経た今やっとここに上って立ったのであったが、それはいたづらに「自分の魂を自ら弄び、軽んじたに過ぎなかった」のである。すべて暗闇の中でひそかに行われたもので、明るみに出されたものではなかったからである。併しここでシチュエーションは新しい方向へ展開するのである。もう少し詳しく十五章にいたる迄の彼に就いて考えてみよう。

小説の最初の数章では、デイズデールに就いてあまり多

くを語っていない。彼の内部の苦悩に直接に触れるのは可成り後においてであるが、彼が罪の共犯者であることは、さまざまの暗示によって読者は容易に読みとる事が出来る。暗示は主として彼の外面的な特徴と変化によって示されるが、ヘスターの罪の相手を探し出そうとする人物、チリグワースを通して次第に明らかかなものにされて行く。彼の罪が隠されたものであってみれば、描写も暗示的であるのは当然であるが、三章に於いて、はじめて、彼が高い教養と秀いでた才能をもち、名声のある牧師として紹介されたすぐ後で、つけ加えられた次のような説明、

...there was an air about this young minister,—an apprehensive, a startled, a half-frightened look,—as of a being who felt himself quite astray and at a loss in the pathway of human existence, and could only be at ease in some seclusion of his own. Therefore, so far as his duties would permit, he trod in the shadowy by-paths,....(p. 76)

はその後について彼に就いてのそのそのその描写を理解する上に極めて重要である。

彼の内部の苦悩はまず、「胸に手をおく」動作によって外部に暗示される。最初、群衆の前でヘスターに相手の男の名前を告白させようとする時、デイズデールの手は胸の上に

おかれている。八章ではポールに関して、ヘスターのために弁護してやる時の彼の動作を次のように描写している。

...the young minister at once came forward, pale and *holding his hand over his heart*, as was his custom whenever his peculiarly nervous temperament was thrown into agitation. (Italics mine) (p. 128)

更に九章では彼の肉体が次第に目にみえて衰弱して来た事が述べられ、それと共に「胸に手をおく」動作は次第に彼の心の内側に秘められた具体的な苦悩を暗示するようになる。

With all this difference of opinion as to the cause of his decline, there could be no question of the fact. His form grew emaciated his voice, though still rich and sweet, had certain melancholy prophecy of decay in it; he was often observed, on any slight alarm or other sudden accident, to *put his hand over his heart*, with first a flush and then a paleness, indicative of pain. (Italics mine) (p. 136)

But how could the young minister say so, when, with every successive Sabbath, his cheek was paler and thinner, and his voice more tremulous than before, —when it had now become a constant habit, rather

than a casual gesture to press his hand over his heart? (Italics mine) (p. 137)

“Nay,” rejoined the young minister, *putting his hand to his heart*, with a flush of pain flitting over his brow, “were I worthier to walk there, I could be better content to toil here.” (Italics mine) (p. 138)

既に述べたように彼の「胸に手をおく」動作はパールによつても再三、追求されるのであるが、このような外部に表われた暗示的な特徴の数々のものと共に彼の苦悩はチャリングワースを通して、或いはこの人物によつて明白にされる。三章に語られているように、チャリングワースはヘスターの前の夫であり、名前を変えてこの地に医師として住んでいる。彼はヘスターが処刑台に立った日にこの地に来合せ、ヘスターの罪の共犯者を探し出し、復讐することを決心する。しかもヘスターに約束させて、その本性を秘密にしておく。彼は次第にディムズデルに近づき、やがて牧師と生活を共にするようになつて、牧師の胸の内の苦悩に異常な興味を持ち、その原因を探し出そうとする。十章に於いて、ディムズデルが熟睡している間、医師はディムズデルが誰にも見せようとしなかつた胸の中を開いて見る。

With what a wild look of wonder, joy, and horror!
With what a ghastly rapture, as it were, too mighty

to be expressed only by the eye and features, and therefore bursting forth through the whole ugliness of his figure, and making itself even riotously manifest by the extravagant gestures with which he throw up his arms towards the ceiling and stamped his foot upon the floor! Had a man seen old Roger Chillingworth, at the moment of his ecstasy, he would have had no need to ask how Satan comports himself when a precious human soul is lost to heaven, and won into his kingdom. (p. 157)

描写は極めて象徴的であるが、ここで意味しているものは医師が遂にディムズデルの胸の内側に緋文字をみた。即ち、ディムズデルが自分の復讐の当の相手である事、ヘスターの罪の共犯者である事をはつきりと察知した事である。次の十一章に付せられた題は「胸の内側」(The Interior of a heart)となつてゐる如く、ここから、ディムズデルの苦悩はもはや暗示の形をとらずはつきりした形で述べられている。彼は自分の隠している罪をくりかえし明るみに出そうと努めるのであるが、それを実行するだけの勇氣と確信を欠いていた。そのために彼の肉体は極度に衰弱する。そればかりでなく、彼自身の存在の意味途が変貌して来るのである。

To the untrue man, the whole universe is false,—it

is impalpable,—it shrinks to nothing within his grasp. And he himself, in so far as he shows himself in a false light, becomes a shadow, or, indeed, ceases to exist. The only truth that continued to give Mr. Dimmesdale a real existence on this earth was the anguish in his inmost soul, and the undissembled expression of it in his aspect. Had he once found power to smile, and wear a face of gaiety, there would have been no such man! (pp. 165-6)

このようなディムズデールの状態をヘスターと比較すれば、ヘスターの毅然とした態度に対して、彼はひどく弱々しく見える。既に述べたようにヘスターは自分の罪に対して、社会とは別の見解をもっていて、しかもそれを確信していた。それが彼女を強くしていたのである。併しディムズデールは自分の犯した姦通に対して、はっきりとした罪意識があった。それは後にも述べるように、ただ単に社会の定めた背徳的な罪としてではなく、もっと根源的な宗教的な罪としての自覚があった。更に彼はもう一つの罪を犯している。それはその罪を隠している事であり、そのため彼の立場が一層困難になっているのである。

このような彼が或る夜、一人で処刑台の上になつて空しい悔悛の真以事をする。彼をつつんでいる暗闇は彼の心の中を

象徴しているといふよう。その時偶然に通りかかったヘスターとパールを彼は呼びとめ、共に処刑台に立つ。それは七年前、彼が当然しなければならなかつたことである。ここでパールは重要な役割を演じている。パールは未だ隠されている暗闇での罪の告白を明るみに出そうとする。執拗にディムズデールに問いかけるパールの言葉、それに対するディムズデールの返事、

“Wilt thou stand here with mother and me, to-morrow noontide?” inquired Pearl.

“Nay, not so, my little Pearl,” answered the minister; for with the new energy of the moment, all the dread of public exposure, that had so long been the anguish of his life, had returned upon him;...“Not so, my child. I shall, indeed, stand with thy mother and thee, one other day, but not tomorrow.”

Pearl laughed.

“But wilt thou promise,” asked Pearl, “to take my hand and mother’s hand, to-morrow noontide?”

“Not then Pearl,” said the minister, “but another time.”

“And what other time?” persisted the child.

“At the great judgment day,” whispered the mini-

ster,.... "Then, and there, before the judgment-seat, thy mother, and thou, and I must stand together. But the daylight of this world shall not see our meeting!"

Pearl laughed again. (p. 174)

は彼が罪の苦悩から救われる迄にはなすべき事が未だ多く残されている事を暗示している。

次の十六章から十九章は主として、デイズデールとヘスターとの森の中の邂逅を中心としている。デイズデールの苦しみがいかに烈しいものであるかを知ったヘスターは、自分の犯しているデイズデールへの罪を自覚した。それは、チャリングワースとの約束である。チャリングワースが如何にデイズデールを苦しめているかを知って、自分の隠している秘密を打明け、デイズデールに許しを乞うために森の中で彼を待つ。ここでもかわされる二人の会話は、実によく二人の罪意識を示している。デイズデールは自分の苦しい胸の内をヘスターに語った時、ヘスターは彼の苦悩が充分に罪を贖うにたりるものであることを強調して彼に安らぎを得させようとする。併し彼はそれに対して、次のように答えている。

"No, Hester, no!" replied the clergyman. "There is no substance in it! It is cold and dead, and can do nothing for me! Of penance, I have had enough! Of penitence, there has been none! Else, I should

long ago have thrown off these garments of mock holiness, and have shown myself to mankind as they will see me at the judgment-seat. Happy are you, Hester, that wear the scarlet letter openly upon your bosom!" (p. 218)

デイズデールは罪を許され、心に平安をとりもどすためには更にすべてを明るみに出して告白する penitence が必要であることを自覚している。併し、ヘスターからチャリングワースの正体を知らされた時、彼は自分の状態に殆んど絶望的になる。そうしたデイズデールにヘスターはこの土地を逃れて共々にもっと自由な土地で幸福にくらす事を提案する。幾度か躊躇した後、彼はそのすすめに従う。彼はあれか、これかの選択——即ち、自分に残されている penitence をはたして、罪より救われるか、この土地をすてて、法の支配しない自由の土地へ逃れるか——に際して、後者を選んだのである。この決断のなされた後、小説は次のような説明をほどこしている。

Be the stern and sad truth spoken, that the breath which guilt has once made into the human soul is never, in this mortal state, repaired. (p. 229)

キリスト教が原罪と呼んでいる罪はただ単に行為の領域に

とどまらないで、それが我々の存在の根源に横わっているような種類の罪とかかわりをもつのである。それが行為の領域にとどまっているならば、それは単に道徳的な次元のものでしかない。存在の領域にまでひろがりをもつ時、キリスト教でいう罪の意識になるのである。従って人間はどこえ身を移しても罪の意識から救われる事は所詮不可能なのである。デイズデールの罪の意識が宗教的な次元のものであったとしても、それが一層明白にされるのは、もっと後の段階であって、ここでは間違つた見解に誘惑されたという事にしておこう。少なくともデイズデールに対しては眞の解決にはならないからである。

この解釈を裏付けるものとして、背景となつてゐる森は実にさまざまの象徴性を持つてゐる。この小説のいたるところで述べられてゐるように、森は魔女たちの集会所であり、當時の人々にとっては「道をふみはづす」悪の象徴であつた。十八章でも「人間の法則にも従わず、またより高い真理の光にも照されないこの森という荒涼たる大自然」(that wild, heathen Nature of the forest, never subjugated by human law, nor illumined by higher truth)と述べられてゐる。ように、森は暗い世界を象徴してゐる。恐らくこの二人が姦通の罪を犯したのもこの森の中でであつたのだらう。従つて彼等の計画も森のもつ不可思議なわざの影響だと考えられる。ここではたすパールの役割もこの解釈を支える意味を持つて

いる。

二十章から二十二章にいたる部分は、森から町へ歸つたデイズデールの心の状態と変化を扱つてゐる。彼は今迄もまつたく異つた衝動に支配されて行動する。こうした衝動は、「目に向つるすべてが今迄とは違つた世界に見えるような」視覚の世界にも投影される。それは彼の今迄もつていた見解がまつたく變つたことを暗示する。彼は自分の心中におこつたこの衝動を抑制する事が出来ない。道で行きあつた副牧師にすんでのところでは不信心な考えを口にしようとしたり、又、教員である老婆に会つても容易に聖句がおもいかばなかつたり瀆神的な衝動にかられる。このような数々の行為を小説は彼が森で決断した計画の故にしてゐる。

The wretched minister! He had made a bargain very like it. (i. e. the act of selling himself to the fiend, mentioned by Mistress Hibbins) Tempted by a dream of happiness, he had yielded himself, with deliberate choice, as he had never done before, to what he knew was deadly sin. And the infectious poison of that sin had been thus rapidly diffused throughout his moral system. It had stupefied all blessed impulses, and awakened into vivid life the whole brotherhood of bad ones. (p. 253)

このような状態で家に帰った彼は、途中でやめてしまつていた選挙祝賀日のための説教を火中に投じて、新たに書き始めた。そして、夜を徹して説教の原稿を書き上げるのであるが、その間におこつたであろう彼の心の内部の葛藤や変化について、小説は直接には何も語ってくれない。それは一つには二十三章の劇的なシーンをより効果のあるものにする技巧上の抑制であるが、実に大きな変化がおこつたであらう事は想像出来る。わづか我々にはヘスターの目を通してそれを察する事が出来る。祝賀日の当日、行列に加わっているデイズデールを見て、ヘスターは、彼が森の中で確認した彼と別の人間のように感じる。

Hester Prynne, gazing steadfastly at the clergyman, felt a dreary influence come over her, but wherefore or whence she knew not; unless that he seemed so remote from her own sphere, and utterly beyond her reach. One glance of recognition, she had imagined, must needs pass between them. She thought of the dim forest, with its little dell of solitude, and love, and anguish, and the mossy tree-trunk, where, sitting hand in hand, they had mingled their sad and passionate talk with the melancholy murmur of the brook. How deeply had they known each other then! And was this the man? She hardly knew him now! (pp. 272-3)

これは次の二十三章への伏線のはたらしきをしているとともに、デイズデールの心中におこつた変化を暗示している。

この小説でしばしば用いられている視覚で内部の世界を見解を投影させる描写であるが、ここですでにヘスターにはデイズデールの到達している次元が理解出来なくなっている。

最後に、二十三章に於いて、デイズデールは、植民地のすべての人々の前で、処刑台に自分の意志で立ち、ヘスターとパールを呼んで自分のもつていた罪を告白するのである。

彼は驚くヘスターに向つて確信に充ちて、自分の選んだこの行為が森の中で夢みた計画よりもよかつた事を語り、人々の前に胸の内側を開いてみせる。ここでもこの小説は極めて象徴的な描写をしているが、ただ「その様子は、もつとも烈しい苦悩の極点に於て勝利を得た人のようであつた」(p. 290)と記している個所はデイズデールが Penitence をなし終えて、罪から救われた事を指摘している。ヘスターのところでも触れたように、ここでデイズデールはヘスターとは異つた次元に立っている。絶えようとする息の下から彼は次のような言葉を残して世を去るのであるが、この言葉の中に彼の罪の意識が宗教的な次元のものであつた事が明白に示されている。

“The law we broke!—the sin here so awfully revealed!—let these alone be in thy thoughts! I fear!

I fear! It may be that, when we forgot our God,—when we violated our reverence each for the other's soul,—it was thenceforth vain to hope that we could meet hereafter, in an everlasting and pure reunion. God knows; and He is merciful! He hath proved his mercy, most of all, in my afflictions. By giving me this burning torture to bear upon my breast! By sending yonder dark and terrible oldman, to keep the torture always at red-heat! By bringing me hither, to die this death of triumphant ignominy before the people! Had either of these agonies been wanting, I had been lost forever! Praised be his name! His will be done! Farewell!" (p. 291-2.)

最後にチリングワースについて簡単に触れておこう。彼は常にデイズデールと共にいて彼の心の苦悩を深め、くるしめるのであるが、チリングワースの罪は人間に許されていない復讐のために人間の魂を冒瀆する事にあつた。ロマ書書十二章十九節には「自ら復讐するな。ただ神の怒りに任せまわれ。録して『主言ひ給う、復讐するは我にあり、我これに報いん』とあるように、復讐は神の領域であり、人間に許されていない。チリングワースの罪は神の領域に敢えて立ち入ろうとした傲慢の罪である。彼の罪が現実には復讐という形を

とつてあらわれた時に、同時に彼は悪の象徴としての役割を演ずる。パールが機能化した人物であるように、チリングワースにも機能化した面が多くみられる。彼の役割はパールと対照的である。パールが光のミンボルであればチリングワースは黒の、或は暗闇のミンボルである。

Would not the earth, quickened to an evil purpose by the sympathy of his [i. e. Chillingworth's] eye, greet him with poisonous shrubs, of species hitherto unknown, that would start up under his fingers? Or might it suffice him that every wholesome growth should be converted into something deleterious and malignant at his touch? Did the sun, which shone so brightly everywhere else, really fall upon him? Or was there, as it rather seemed, a circle of ominous shadow moving along with his deformity, whichever way he turned himself? (p. 199.)

従つて彼は明るみに出ようとする罪をおおい隠そうとする。二十三章でデイズデールが処刑台に上ろうとする瞬間、それを懸命になつて阻止しようとする。然しながら、デイズデールが罪の告白をなし終るとすぐ、対象を失つた恵としての役割は、現実のチリングワースの死によつて終るのである。

チリングワースという形をとって現実に存在する悪の原理が二元論的な意味での悪の存在を意味しているのか、先に引用したデイズデールの最後の言葉に裏書されているように、旧約ヨブ記の悪魔の如く、神の支配下にあつて告発者としての役目をもつたものか、多くの疑問を残しているが、ホーンはこの悪の力の存在に非常な関心を持つていた事は間違ひなく、例えば『若いグッドマン・ブラウン』中のブラウンが森の入口で出会う老人のように、いろいろな作品にくり返してこの問題を追求しているのである。

IV

私は序文に於いて「緋文字」の主題を主要人物、ヘスター、デイズデールの何れか一方の生き方に求める見解をさけて、緋文字で象徴される罪の意識の問題に求める事によってこの考察を始めた。そして二人のたどつた生き方を通してそれぞれの罪に対する意識を考えてみた訳である。二人は共に罪を犯したにもかかわらず、まったく異つた生き方をしたが、この異つた生き方の中に実は、罪に対する二人の意識の相異がみられるのである。究極に於いて二人ともそれぞれに救いを見出す。がこの小説が最も関心をもっているのは彼等の罪の意識に苦悩する過程にある。この小説を通じて、ホーンが終始関心を持つていた問題は現実にある罪の意識と悪の原理の存在の問題であらう。罪の意識は極めて相対的なものと

人はいう。或いは罪の意識は心理的な(しかも病的な)妄想だともいう。姦通という行為にしても、重要なのは愛情であつて、そうした愛情を疎外し、罪だとする法律こそ改められるべきだとする見解もある。或いはすべての行為を戒律で律しようとする見解もある。これらあらゆる見解にもかかわらず、人間にはその存在にかかわりをもつような罪の意識もあるのである。しかもいずれの見解も現実にある限りにおいて間違つていない。ホーンはこうした現実に存在するさまざまな見解に関心をもつていたと解釈するのが妥当ではないかと私は考える。従つて我々はこの小説に性急にヘスターの生き方か、デイズデールの生き方か、いづれか一方に彼の解決を見出そうとしてはならない。私のこのような解釈を実証してくれるものとして、この小説が常に一つの事件について、さまざま異つた見解を提示している事実を求める。例えば、一例として二十四章に於いてデイズデールが開いて群衆にみせたといわれる胸の内側について、少なくとも五つの異つた見解を提示している。客観的に同じ行為であっても主観的には、その行為に対する意識は多くのヴァリエーションをつくる。人間の営みはそのヴァリエーションの上に行われるものである。人々がヘスターの生き方を肯定している時でさえ、同時にデイズデールの生き方が「人間とは何か」という根本的な問題を提示し得るとすれば、この作品『緋文字』の持つ生命の秘密は、実はそこにあるのではあるまいか。

註

① felix culpa の思想は例せばロマ書五章二〇章に於けるパウロの言葉「律法がはいり込んだのは、罪過の増し加わるためである。しかし罪の増し加わったところに、恵みもますます満ちあふれた」にも見られる。Milton: *Paradise Lost* に於けるマダムの言葉でも「幸福なる墮罪」の思想がみられる。

② Weisk & Warren, *Theory of Literature* (New York Harcourt, Brace, 1949), pp. 139-143. 参照。

③ Leonard J. Fick, *The Light Beyond* (Westminster, Maryland: The Newman Press, 1955), pp. 72 ff. 参照。

④ cf. *The Scarlet Letter* ("Modern Library College Edition"), p. 72.

⑤ 例えは "It had the effect of a spell, taking her out of the ordinary relations with humanity, and enclosing her in a sphere by herself." (p. 62) 参照。

⑥ cf. Richard Chase, *The American Novel and Its Tradition*.

珍書・怪書(24頁から) 発信地を手掛りにして調べた結果、この日記の所持者と称する男は William Symmes と言い、一八七一年フロリダ州のペンサコーラで死んだことが明らかになった。更に彼の身許を調べたところ、W・シムズは白人の父と黒人の母の間に生れた混血児で、二歳の時に実父と死別してからはジョナサン・ブリトンという人の許にひきとられ、二十歳の時に船乗りになって海に出るまで、ホーンソンの住んだレイモンドの近くに住み、一つ年上のホーンソンと親しかったという事実が判明した。南北戦争当時には北軍のベイカー大佐の許でスパイのような仕事をしていたらしい。編者が彼の生存中探偵をやとって、この人物について情報を得ようとしても一向はかばかしくなかったのは、そのためであつたらしい。

tion ("A Doubleday Anchor Book"), p. 77. Little Pearl, one should say first, is a vividly real child whom Hawthorne modelled on his own little daughter Una...に就つては疑問を持つ。

⑦ この部分分けはあくまで便宜上のものである。だいたいにおいてこの二人の人物を分けて、別々に取扱う事によつて失なう点が多い。この二人の場合は美事に織りなされている。二人を結びつける主な要素として処刑台の場が考えられる。第二章の処刑台、十二章の処刑台、二十三章の処刑台の場はそれぞれに重要な意味を持つとともに、この小説を均等な部分に分けている更け、パールがこの二人を結びつける大きな要素になっている事も同じに指摘したい。

⑧ チリングワイスの老醜とパールの若さ、パールがばらに比較されているのに対して、チリングワイスは、雑草、毒草に比較しているなどすべてに於いて、対照的である。

W・シムズの手紙によると、彼は南北戦争当時、メイン出身の兵隊に會つてこのホーンソンの日記をゆずり受けたという。この兵隊は、ホーンソン一家がかつて住んでいたマニング家の引越の手伝いに行つて、本箱にのこつていたこの日記を見つけ、わからずながらとにかく持っていたのだをうた。シムズの手に入つた日記は、彼の伝えるところでは、六時×八時の大きさで、約二五〇頁よりなり、最初の頁には、リチャード・マニングからもらつた旨記入してあるそうである。日記は水にぬれたらしく、綴はゆるみ、虫喰もひどく、日附も判別し難くなつていゝがと斷つて、シムズはこの内容をそっくり写して編者の許に送つたそうである。こんな事情でこの日記の一部が新聞に発表され、(64頁に続く)